

日蓮大聖人御書全集

けんりっしょういしょう

顕立正意抄

新版
638
ゝ
640

けんりつしょういしょう

顕立正意抄

ぶんえい ねん がつ にち さい

文永11年(74)12月15日 53歳

にちれん い しょうかがんねんたいさいひのとみはちがつにじゅうさんにち おおじしん

日蓮、去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月二十三日の大地震を

み かんが さだ か りつしょうあんこくろん い

見て、これを勘え定めて書ける立正安国論に云わく

やくしきよう しちなん うち ごなん お なん のこ

「薬師経の七難の内、五難たちまち起こり、二難なお残れ

たこくしんぴつ なん じかいほんぎやく なん だいじつきよう

り。いわゆる他国侵逼の難・自界叛逆の難なり。大集経の

さんさい うち にさいはや あらわ いっさい お

三災の内、二災早く顕れ、一災いまだ起こらず。いわゆる

ひようかく わざわい こんこうみようきよう うち しゅじゅ さいかいちいち お

兵革の災なり。金光明経の内の種々の災禍一々起こる

たほう おんぞくこくない しんりやく さい あらわ

といえども、他方の怨賊国内を侵掠する、この災いまだ露

れず、この難いまだ来らず。仁王経の七難の内、六難今盛

なん
いちなん

きた
げん

しほう

ぞくきた

くに

んにして、一難いまだ現ぜず。いわゆる、四方の賊来つて国

おか

なん

こくどみだ

とき

を侵すの難なり。しかのみならず、『国土乱れん時はまず

きじんみだ

きじんみだ

ゆえ

ばんみんみだ

いま

もん

つ

鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る』と。今この文に就い

こと

こころ

あん

ひやつきはや

みだ

ばんみんおお

ほろ

てつぶさに事の情を案ずるに、百鬼早く乱れ、万民多く亡

せんなん

あき

こうさいなん

うたが

のこ

ぶ。先難これ明らかなり、後災何ぞ疑わん。もし残るとこ

なん

あくほう

とが

なら

お

きそ

きた

とき

ろの難、悪法の科によつて並び起こり競い来らば、その時

ていおう

こつか

もとい

てんか

おさ

じんしん

かんがせんや。帝王は国家を基として天下を治め、人臣は

でんえん

りよう

せじよう

たも

たほう

ぞくきた

田園を領して世上を保つ。しかるに、他方の賊来つてこの

くに しんぷく じかいほんぎやく ち りやくりよう おどろ

国を侵逼し、自界叛逆してこの地を掠領せば、あに驚か

さわ くに うしな いえ ほろ

ざらんや、あに騒がざらんや。国を失い家を滅ぼさば、い

ところ よ のが とううんぬん いじよう りつしうあんこくろん ことば

ずれの所にか世を遁れん」等云々へ已上、立正安国論の言

なり。

いま にちれんかき しる い だいかくせそんしる のたま

今、日蓮重ねて記して云わく、大覚世尊記して云わく

くとかげどう なのかあ し のち じきとき

「『苦得外道は、七日有つて死すべし。死して後、食吐鬼に

う くとかげどうい なのか うち し

生まれん』。苦得外道言わく『七日の内には死すべからず。

われ らかん え がきどう う とううんぬん せんばじよう

我、羅漢を得ん。餓鬼道には生まれじ』と」等云々。瞻婆城

ちようじや つまかいにん ろくしげどうい によし う ほとけ

の長者の婦懷妊す。六師外道云わく「女子に生まれん」。仏

しる のたま なんし う

とううんぬん ほとけしる

い

記して云わく「男子に生まれん」等云々。 仏記して云わ

さ のちみつぎ

われ まさ はつねはん

とううんぬん

く「却つて後三月あつて、我は当に般涅槃すべし」等云々。

いつさい げどうい

もうご

とううんぬん ぶつき

一切の外道云わく「これ妄語なり」等云々。 仏記のごとく、

にがつじゅうごにち

はんねはん

たま

二月十五日に般涅槃し給えり。

ほけきよう

だいに

い

しやりほつ

なんじ

みらいせ

法華經の第二に云わく「舍利弗よ。 汝は未来世において、

むりようむへんふかしぎこう

す

ないしまさ

さぶつ

う

無量無辺不可思議劫を過ぎて乃至当に作仏することを得べ

な

けこうによらい

い

とううんぬん

だいさん

まさ

い

し。 号づけて華光如来と曰わん」等云々。 また第三の巻に云

わ

でし

まかかしよう

みらいせ

まさ

わく「我がこの弟子・摩訶迦葉は、 未来世において、 当に

さんびやくまんおく

ぶごん

う

ないしさいごしん

三百万億を奉覲することを得べし乃至最後身において、

じよう

ほとけ

え

な

こうみようによらい

い

成じて仏となることを得ん。名づけて光明如来と曰わん

とううんぬん

だいし

まき

い

によらいめつど

のち

等云々。また第四の巻に云わく「また如来滅度するの後に、

ひとあ

みようほけきよう

ないしいちげいつく

き

いちねん

もし人有って妙法華経の乃至一偈一句を聞いて、一念も

ずいき

われ

あのくたらさんみやくさんぼだい

き

さず

随喜せば、我はまたために阿耨多羅三藐三菩提の記を授く

とううんぬん

等云々。

きようもん

ほとけみらいせ

こと

しる

かみ

あ

これらの経文は、仏未来世の事を記したもう。上に挙ぐ

くとかげどうとう

さんじふごう

たれ

ぶつご

しん

るところの苦得外道等の三事符合せずんば、誰か仏語を信

たほうぶつしようみよう

くわ

ふんじん

しよぶつちようぜつ

ぼんでん

ぜん。たとい多宝仏証明を加え、分身の諸仏長舌を梵天

っ

たも

しんよう

がた

に付け給うとも、信用し難きか。

いま

今またもつてかくのごとし。たとい日蓮、富楼那の弁を得

もくれん つう げん

かんが あ

たれ

て、目連の通を現ずとも、勘うるところ当たらずんば、誰か

しん い ぶんえいごねん もうここく ちようじようわ ちよう

これを信ぜん。去ぬる文永五年に蒙古国の牒状我が朝に

とらい けんじん あ

渡来するところ、賢人有らばこれを怪しむべし。たといそ

しん い ぶんえいはちねんくがつじゆうにちごかんき こうむ

れを信ぜずとも、去ぬる文永八年九月十二日御勘気を蒙り

ときは とうごん つぎ としにがつじゆういちにち ふごう

しの時吐くところの強言、次の年二月十一日に符合せしむ。

こころ あ もの しん ことしすで

情有らん者はこれを信ずべし。いかにいわんや、今年既に

か こくさいひよう うえ に かこく うば と ぼくせき

彼の国災兵の上、二箇国を奪い取る。たとい木石たりとい

きんじゆう かん おどろ

えども、たとい禽獸たりといえども、感ずべく驚くべし。

ただごと

てんま くに い

よ

ひとえに只事にあらず。天魔の国に入つて、酔えるがごと

くる

なげ

あわ

おそ

いと

く、狂えるがごとし。歎くべし、哀れむべし、恐るべし、厭

うべし。

りつしょうあんこくろん

い

しゅうしんひるがえ

きよくい

また立正安国論に云わく「もし執心翻らず、また曲意

そん

はや

うい

さと

じ

かなら

むけん

ごく

お

なお存せば、早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に堕ちな

とううんぬん

いまふごう

みらい

あん

にほんこく

ん」等云々。今符合するをもつて未来を案ずるに、日本国の

じょうげばんにん

あびだいじょう

お

だいち

まと

上下万人、阿鼻大城に堕ちんこと、大地を的となすがごと

し。

お

にちれん

でしとう

これらはしばらくこれを置く。日蓮が弟子等、またこの

や かわ は せつせん こくおうとう
焼き、皮を剥ぎ、雪山・国王等のごとく、身みを投なげ、心こころを

つか ごたい ち な へんしん あせ なが
仕えよ。もししからずんば、五体を地に投げ、遍身に汗を流

ちんぽう ぶつぜん つ
せ。もししからずんば、珍宝をもつて仏前に積み。もしし

ぬひ じしや つか
からずんば、奴婢となつて持者に奉えよ。もししからずん

とううんぬん ししつだん とき かな わ でしとう なか
ば等云々。四悉檀をもつて時に適うのみ。我が弟子等の中に

しんじん うす もの りんじゆう とき あびごく そう げん
も信心薄淡き者は、臨終の時、阿鼻獄の相を現あらわすべし。そ

とき われ うら とううんぬん
の時、我を恨むべからず等云々。

ぶんえいじゆういちねんたいさいきのえいぬじゆうにがつじゆうごにち にちれん しる
文永十一年太歳甲戌十二月十五日 日蓮これを記す。